

礼拝を考える

2013. 1. 13～14

①【礼拝から全てが始まる】

「ぶどうの木・キリストの体」である教会が最もはっきりとした姿で現れる出来事こそ、主日礼拝の時である。教会とは礼拝そのものであり、礼拝を離れて教会はありえない。

・「一同が一つになって集まっていると、」（使徒2：1）

聖霊は一同が集まっているところに降った。「一同が一つになって集まっているところ」とは礼拝の時のことである。聖霊降臨は礼拝の中で起こってくる。礼拝を守っていた弟子たちの間に、神は聖霊を送り、聖書を書かせ、まことの教会を誕生させた。だから、礼拝を熱心に守らない教会は、教会にはなれないのである。礼拝があつて教会が生まれたのであつて、教会があつて礼拝が始まったのではない。礼拝から、教会形成、聖書正典、伝道が始まっていったのである。教会が本当に駄目になってしまったのは、外部の圧力（迫害）というよりも、むしろ内部の問題によるものであった場合が多かった。キリスト教の本質を内部から歪んだ性質のものに変えてしまう異端の発生。教会が単なる制度や習慣に墮落し、その生命線ともいべき礼拝がいかげんになり、教師も信徒も祈りや讃美を怠り、聖書の神の言葉を真剣に受け止めず、馴れ合いの人間関係が教会の中に横暴をきたし、すべてが曖昧にされ、流されてしまうようになったとき、教会は内側から崩壊したのである。（エリコも内側から崩れた。）

②【礼拝とは死と復活の予行練習】

・「週の初めの日、私たちがパンを裂くために集まっていると、…エウティコという青年が、…起こしてみるともう死んでいた。…人々は生き返った青年を連れて帰り、大いに慰められた。」（使徒20：7～12）

当時の礼拝は朝ではなく、夕方であったことが分かる。当時日曜日は、まだ休みではなかったので、信者は、朝集まって共に食事をし、仕事に出かけ、夕方再び集まって礼拝と聖餐（夕の食事の中でパン裂きをしていた）をしていたということが分かっている。「週の初めの日、私たちがパンを裂くために集まっていると」とあるように、礼拝はパン裂き＝聖餐が中心だったことが分かる。また、ここではパウロが長い説教をしている。それは夜中まで続いていた。場所は「階上の部屋」といわれる「信徒の家の教会」だった。礼拝中に、この青年が窓から落ちて死に、また生き返ったという物語はわたしたちに何を教えているのか？

○ 礼拝とは『死と復活』が起こる場であるということ。

真の礼拝の中で、「生ける神」と出会うことは、同時に私たちの罪、隠して、誤魔化しているところに光が当たるということである。本当の自分を見つめさせられ裸の自分、罪ある自分を認めざるをえなくなるということである。それと同時に、神の愛、赦しを聞くという時でもある。《古い自分に死ぬことのない安全な礼拝、古い自分に安住した礼拝》とは一体どんな意味があるのだろうか。死ぬから復活するのである。礼拝とは、死と復活の予行演習なのである。

③【礼拝とは神を第一とすること】

・「あなたが民をエジプトから導き出したとき、あなたたちはこの山で神に仕える」(出エジプト3:12)

奴隷であるユダヤ人は神を礼拝することが自由に出来なかった。奴隷は礼拝できないのである。神ならぬモノの奴隷になっている人間はまことの神を礼拝できない。日本の国は、軍国主義(力による支配)から、経済至上主義(お金による支配)へ変わっただけのことである。「月、月、火、水、木、金、金」という歌があったが、これは今も同じである。

④【礼拝とは安息であり、自分を完成させる日】

・「第七の日に神はご自分の仕事を完成され、第七の日に、神はご自分の仕事を離れ、安息なさった。」(創世記2:2)

六日間で神は、万物を創造され、第七の日に神はご自分の仕事を完成されたという。第六日の日に完成されたのではなくて、第七の日に完成したという。私たちはずっと、第六日の日に完成されたと思い込んでいたのではないだろうか。では第七の日にどんな仕事が残っていたのだろうか。それは仕事を離れ、安息するという仕事である。これで初めて世界は完成されるのである。ところがこの世は、造るだけ造って神の前に安息することを止めてしまった。自分の仕事を止めようとしなさい。自分の仕事を離れようとしなさい。だから万物は完成されていないのだ。未完成なのである。人生も同じである。

◇《安息》とは何か? 「仕事を離れる」とも言い換えられている。それは、自分の仕事を一旦中断するということである。人生はすべて中断である。まだやりたいこともある。どうしてもこれだけはこの思いもある。自分がやらなければという思いもある。しかし、人生も仕事も家族のことも結局は、中途半端で終わるのである。日曜日ごとの礼拝とは、仕事を止めて集まることである。仕事はどこまでも私たちを追いかけてくる。しかし、それを絶って来るのである。礼拝の時間、ここに来なければ、あれが出来、これも出来ると思う。しかし、それを止めて集まるのだ。それは何を教えているのだろうか。それは人生の主人は自分ではないということなのである。人生を支配している

のは神であって私ではないのだ。神は突然、私の命を絶つ。神は突然、思いがけないことを行われる。神が私の人生の主人なのである。それを告白し、行動に表しているのが礼拝なのである。そして神だけが私の人生を完成することが出来る方なのである。「**第七の日に神はご自分の仕事を完成され**」とあるからである。

だから、本当の安息とは未完成な自分、未完成な自分の人生、仕事を神にお委ねして、神によって完成させてもらおうとする委ねる心を持つことなのである。いくら日曜日の礼拝を守っていても、神に委ねなければ、自分で何とかしなければ、自分で完成させようと執着して思っているならば、仕事を離れたことにはならず、また完成もされないのである。日曜日ごとに、すべてを一旦放棄する。捨てる。これが真の安息なのである。

・「**第七の日を神は祝福し、聖別された。**」(創世記2:3)

この第七の日を神は祝福された。他の六日間ではない。この第七の日を祝福し、この第七の日が祝福されているのである。だから、この第七の日の祝福に与らなければ祝福されないのだ。すべての物事が堂々巡りをし、やがて空しくなっていくてしまうのだ。この第七の日の祝福を持って一週間を過ごすのであり、一週間を祝福の内に歩むのである。

・「**安息日を心に留め、これを聖別せよ。六日の間働いて、何であれあなたの仕事をし、七日目は、あなたの神、主の安息日であるからいかなる仕事もしてはならない。**」(出エジプト20:8)

「**聖別された。**」とはどういうことだろうか。聖別の聖とは「神」のことである。だから神のもの、神に属するもの、神のものを聖という。「聖なる民」とは品行方正な純白な、清く美しいという意味ではなく、神のものとされた民、神が選んで仕事を与えた民、神の仕事をするために分けられた民という意味である。「聖堂」とは神のために用いられるお御堂、神のことを記憶し、神のものとなったお御堂のことである。「聖器物」とは、神のために用いられる道具という意味である。衛生上のことではない。

《別》とは「分ける、分離する」ということである。

つまり、安息日(日曜日)は《神の日、神に属する日、聖なる日、神のもの》であって、あなたの日ではないのだ。他の6日間とは質が違う日なのだということをおぼえさせることである。ゆえに神の日を自分の日であるかのように用いることは、神の日泥棒をしているのであり、その人は盗人である。逆に、この日が神の日だから聖なのであり、祝福されているのである。誰もが「主の安息日」を認めようとしない時に、それを「主の日」として取り分けることこそ、キリスト者のしるしであり、世の人への証しとなるのである。

④【リタージという意味】

英語で礼拝のことを「リタージ」という。ギリシャ語の「レイトゥルギア」から来ている。この言葉は「ラオス（人々、民、国民）」と「エルゴン（仕事、働き）」という言葉からなっている。「人々の果たす公共の仕事」「国民の公務」という意味である。ローマ帝国では、公共の土木工事で働くこと、税金を支払うこと、兵役の義務もこの言葉で表現された。

初代教会は、この「レイトゥルギア＝リタージ」という言葉を、礼拝に関わることや奉仕に使った。（使徒 13：2、ヘブライ 9：21、10：11）

①礼拝とは、参加者である神の民全員によって形作られる共同作業である。プロテスタント教会の人々の中には「リタージカルな礼拝」という言葉を聞くと、「儀式的な礼拝」という意味で捉えている人がいるが、そうではない。

「リタージカルな礼拝」とは「礼拝参加者全員が共に礼拝を守るために、各人がそれぞれの役割を積極的に果たしている状態のこと」をいっている。特定の牧師や、一部の信徒だけが礼拝を奉仕し、その責任を担い、それ以外の人々が「お客さん」のような状態に置かれている礼拝は、本来の礼拝の姿ではないということになる。会衆全員が、自分も礼拝に参加したという実感がもてるような礼拝、自分も声を出して朗読し、歌い、祈り、奉仕をし、動作をする礼拝のことである。

②礼拝とは、単なるプライベートな事柄ではなく、キリスト者にとっての「公の仕事」である。「リタージカルな礼拝」とは「公の礼拝」であって、キリスト者にとっては何ものに勝って守るべき「公務」であることを意味している。神の国の市民＝キリスト者にとって礼拝を守ることは公務である。

近代では信仰を私的な事柄、内面的な事柄とする傾向が強まった。信仰の個人主義化ということである。礼拝を教会の業ではなく、プライベートなこととして考えるようになってしまった。その時々自分のニーズに合わせて、レジャーを選ぶように教会を選ぶ。教会に仕えるというよりは「そこから何を得ることが出来るか。何をもらえるか。」だけを考えるような「お客さん信者」を作るようになっていった。自分さえ良ければいい、他人のことはどうでもいい、私は関係ないという民をキリストは嘆いた。目の前にいる苦しんでいる隣人、苦しんでいる教会員を無視し、世界や未来に対しても責任を負うことをしない教会になったら、その教会はキリストの教会とはいえないのではないか。キリストは罪人と関わられたからである。